

2008 年度卒業論文
指導教員；立木茂雄教授

家族内におけるペット重要度

同志社大学社会学部社会学科

学籍番号； 19051019

氏名； 今岡那々子

要旨

ペットとわたしたちは、共に生きてきた。そしてペットの立ち位置も、時代とともに変化してきた。それは、わたしたちのいうところの「家族」が常に変化しており、姿かたちを変えているからである。ペットの家族化という言葉はよく耳にするし、ペットは当たり前家族であるといってペットをかわいがる友達をたくさんみてきた。長年飼っていたペットが亡くなったときには学校を休むほどショックを受けていた子を見たこともある。いつの時代か、ペットが亡くなると学校を公欠できる時代がくるのではないかと思うくらいだ。「家族」の形によって、わたしたちが考えるペットの立ち位置が家族になるのか、ならないのか。家族が合意制家族へと変化するとともに、ペットも家族になり始めてきている、というのがその真相である。

—目次—

第1章	はじめに…3
第2章	先行研究…4
2-1	ペットの先行研究…4
2-2	家族論の先行研究…9
第3章	研究方法…15
3-1	調査仮説…16
3-2	調査方法…16
3-3	JGSS2000 について…16
3-4	従属変数について…17
3-5	独立変数について…21
第4章	結果と分析…22
第5章	考察…26
第6章	おわりに…26

第1章 はじめに

「ペット」は、家族なのだろうか。やはりペットはペットだ、という人もいるだろうし、ペットは家族だと答える人もいるだろう。広辞苑（1998）によると、ペットとは「愛玩動物。愛玩する目的で飼う動物。」と定義されている。大切にかわいがる目的で飼った動物が、いつの間にか家族のような存在や、時には家族以上の存在になる背景には何があるのだろうか。

では、家族の定義はどのようなものだろうか。社会学小事典（2005）によると家族とは「夫婦関係を基礎にして、そこから親子関係や兄弟姉妹の関係を派生させるかたちで成立してくる親族関係者の小集団。しかも、感情融合を結合の紐帯にしていること、ならびに成員の生活保障と福祉の追及を第一の目標としていることにその基本的特徴がある。そればかりでなく家族は人間社会の基礎単位であり、また人間形成（またパーソナリティ形成）、したがって社会化の基礎的条件を提供する最も重要な社会集団である。その意味で家族は、『基礎的社会集団』（基礎集団）の代表というべきものである。どの家族も基本的には、夫と妻、親と子を組み合わせとした集団的な核を持っているが、親子関係のどこまでを家族という集団の範囲とするかは、その家族のおかれた時代のあり方や慣習と密接に結びついている。（以下略）」と定義されている。また、ギデンズ（2004）によれば、家族とは「親族関係によって直接つながっている人びとの集団であり、その大人成員は子どもたちの養育に責任を負っている。」とされている。家族は時代に応じてさまざまな姿かたちへと変化を遂げてきた。本稿では、家族というものに対する考え方が、ペットを家族と思うか否かという考えにどのような影響を与えているかを明らかにし、そしてその要因についても考察していくことにする。

直系制家族モデル、夫婦制家族モデルであれば、ペットを家族成員のなかでそれほど重要とは考えておらず、逆に合意制家族モデルであればペットを家族成員の中で重要だと考える傾向にあるのではないか。家族を直系制家族や夫婦制家族と捉えていけば、ペットはやはりペットだと考え、家族を合意制家族として捉えていけば、ペットは家族だと考える傾向にあるのではないか、というのがわたしの仮説である。そしてこの仮説を本稿では明らかにしていきたい。

第2章 先行研究

2-1 ペットの先行研究

(1) ニュースで取り上げられるペット

10月7日、朝いつものようにフジテレビのめざましテレビを見ていたところ、今日のわんこ、今日のにゃんこ、などといったペットを紹介するコーナーではなく、ペットに関するニュースがとりあげられていた。猫1300万匹、犬1200万匹、実際には猫や犬の正確な絶対数を知ることは不可能だろうが、日本の18歳未満人口よりも多いと紹介されていた。ベネッセコーポレーションが、いぬのきもち保険、ねこのきもち保険、といったペットの医療保険を商品にして販売しており、さらにはペットの養老院や、ペットの幼稚園まであるというのだから驚きである。ペットの幼稚園では、飼い主さんから先生に連絡帳などが入った登園バッグが手渡され、前回の登園から今日までの様子が引き継がれるのだという。降園は17時で、それまでトレーニングやランチ、お昼寝などさまざまなプログラムがあるのだ。そのほか、通知表があるなどまさに人間と変わらない扱いを受けている。何度かテレビで紹介されていたのを見たことがあるものでは、犬の気持ちがわかる機械、その名も「バウリンガル」。2002年9月に発売され、大ヒットとなったタカラトミーの犬語翻訳機である。犬の首輪に取り付けた小型のワイヤレスマイクで鳴き声を本体端末に送信し、そのときの犬の気持ちを翻訳して本体に表示するというもの。小泉元首相がロシアのプーチン大統領に贈ったり、さらには2002年度のイグ・ノーベル賞平和賞を受賞したりと世界的な商品となった。ペットと一緒に泊まれるホテルは繁盛し、石川県野々市町にはペット専用の温泉があり、神経痛や疲労回復に効果があるといわれている。宮崎県には会員制の犬のフィットネスクラブがあるし、名古屋ではペット専用の「ペットタクシー」が話題を集めている。ここまでくると、人間にあってペットにないものはないといってもいいだろう。

私は今現在ペットを飼ってはいないが、昔は文鳥を3羽飼っていたし、小学校の時にはクラスの皆でハムスターを飼っていたこともあった。実際、今ペットを飼っていなくても過去に飼ったことがある人は多く、今やなくてはならない存在であるといえるだろう。犬の散歩をする人は毎日どこへ行っても見かけるし、電車でカバンにペットを入れて連れてきている人、さらにはペットを連れて食事に行く人も多いのではないか。私のアルバイト先にはテラス席があり、よく飼い犬を連

れての食事や、中にはオウムを肩に乗せてくるお客様もいる。このように、ペットは私たちの生活と深く密着しているのだ。

(2) 「人間化」するペット

家族のようなペットと聞いて私が最初に思い浮かべたのが、「フランダースの犬」であるが、物語やアニメを思い浮かべたとき、実に多くの作品にペットのような動物の存在がうかがえる。小学生のときによく見たセーラームーンにはルナとアルテミスという猫が描かれていたし、アンパンマンではチーズという犬が登場する。クレヨンしんちゃんではシロという犬が登場し、今人気のワンピースではトニートニー・チョッパーというキャラクターが、もともとは野生のトナカイだったが、とある実を食べてから人間としての能力を身につけた、という設定でキャラクター化されている。挙げだせばきりがなくらいである。

なかでも興味深いのは、セーラームーンやワンピースのように、実際にはしゃべるはずのないオオカミやカエル、猫、トナカイが人間と同じ言葉を発し、いわゆる「人間化」されて物語に登場することである。動物が言葉を発することが物語やアニメの世界ではごく当たり前になってきているし、私自身も猫やトナカイが言葉を発することに違和感を覚えたことは一度もなかったように思う。

(3) デジタルペットの時代

実際にペットを飼うとなれば、犬ならば散歩も必要だし、餌もちろんあげなければいけない。そしてえさ代、小屋やおもちゃなどなにかとお金がかかってくるのが事実。そんな中、携帯であったり、ゲーム機であったりの中で、ゲーム感覚で育てるバーチャルペットが流行している。なかでも一番印象に残っているのは、たまごっちである。たまご型の機械の画面に登場する「たまごっち」と呼ばれるキャラクターにえさをやったり、フン掃除をしたり、「たまごっち」と遊んだりしながら育てていくものだ。こまめにえさをやっていたら機嫌がいいが、えさをやり忘れていたり、フン掃除が滞ったりすると機嫌が悪くなり最悪の場合には死ぬこともある。1997年を中心に、社会現象になるほどの爆発的人気を誇った。これに近い分野では、ロボットの一種にペットロボットがあげられ、単純なものではおもちゃの一種として扱われている。

(4) 社会学者のペット論

ペットに関する文献は実にたくさん出版されている。山田昌弘（2007）によれば、1990年代、パラサイトシングルが急増して家族構造が激変する中、ペットはいまや、現代人にとって人間以上のかけがえのない感情体験を与えてくれる家族となったのだという。

尚、本章では特に記述がある場合を除き、山田(2004)の概念を参考、もしくは引用しており、本章では次節以降の山田(2004)からの引用や参考に際する参考文献の記述を、特に強調したい場合を除き省略することとする

山田（2004）は、飼い主によって家族同様に愛しまれている小動物を「家族ペット」と呼んでいる。意外なことに、これだけペットブームだといわれているが、飼われている数自体はそれほど変化がないのだという。厚生労働省の『狂犬病予防法に基づく犬の登録頭数と予防注射頭数等調査』によると、犬の登録頭数は1981年では約310万匹、1990年は390万匹、2000年は560万匹だから、爆発的に増えているわけではない。では、なにが変わったのか。変わったのは「人の態度」なのだという。飼い主のペットに対する態度が変化していることが特徴だ、と。ダイエット食やサプリメントを与え、とにかくペットの健康に気を使って、長く生きてほしいという願いが強まっているのだ。

パラサイト・シングルと家族ペットは双子のような現象なのだという。ここでいうパラサイト・シングルとは、親に基本的生活を依存してリッチに暮らす未婚者、いわゆる寄生独身者を指す。そもそも人はなぜペットを飼うのだろうか。ペットは人の役に立つから飼われている。ペットには、一緒にいると楽しいとか、温かくて、やわらかいといった、よくいわれる癒しの効果がある。だが、これだけではペットが必要とされる理由が十分説明できていない。なぜなら、ここには「なぜペットでなければいけないのか」という問いに対する答えがないからだ。癒しの効果だけならば、ペットでなくてもいいわけである。ペットには先に述べた一緒にいて楽しい、癒される側面もあるが、同時に面倒くさいという側面、そして悲しみの経験も伴い、出費も要求される。毎日エサをやらなければいけないし、フンの始末をしなければならない。犬なら散歩も必要だろう。何より長期間の旅行をしにくくなる。そして、「ゆりかごから墓場まで」大きな出費が伴う。もし、ペットが飼い主にとって、単なる「機能」をもたらすだけのものであれば、役に立たなくなれば捨てればよいし、買い換えればよい。ましてや、負担や悩みをもたらすものになれば、飼っている理由はない。ポイントは、どの飼い主も、自分がペットに対していかに苦勞し、犠牲を払っているかを強調する点だという。ペットについて語る飼い主たちを見ていると、「わ

が子のために尽くしている」と嬉々として語るパラサイト・シングルの親たちの姿が重なってくるのだ。先の話に戻るが、なぜ人びとはペットを飼うのか、という問いかけに対して山田（2004）は、「かけがえのなさ」と「自分らしさ」だとしている。「かけがえのなさ」とはつまり相手から自分が必要不可欠な存在だと認識されること。そういう関係を結びたいという欲求が人間にはもともとそなわっているが、家族成員とそのような関係を結べない人が増えているからだろう。次に「じぶんらしさ」であるが、これは、演じたり、偽ったりせずに素の自分をそのまま出せるということの意味している。人はみな、何か特別なことをしたり、気を使わなくてもいい、ありのままの自分が実感できる場を求めている。しかし、今は家族の中でも、けっこう自分を演じていたり、気を使っている人がいるからだろう。だから人はペットを飼い、そして家族以上の存在としてペットをみなすことがある、と山田（2004）は述べているのだ。しかし法律ではペットは物であるとも述べている。人が他人の犬や猫を傷つけても、物としてしか扱われないため「器物破損」になるだけなのだ。ただ、最近では動物愛護法や条例によって、人からもらった動物を虐待した容疑で訴えられ、有罪判決を受けるケースもでてきた。たとえ自分の所有物でも、動物は愛護しなければならないという意識が浸透し、「ペットは物ではない」という判例がどんどん出てくるかもしれない。

また山田（2004）は、アメリカで、人間と一緒に暮らすペットを「コンパニオン・アニマル」と呼ばれだしたことに着目している。「コンパニオン・アニマル」は、理想と現実のギャップに直面した人間が、ファンタジーのなかに理想の家族を求めるその欲求にこたえるかたちで登場してきたのである。こう考えれば、ペットはその存在によってファンタジーの中の理想的家族を想像できる「ツール」といえるのかもしれない。家族のかわりではなく、理想の家族がその中に宿っているという感じだから、理想の家族の「よりしろ（神や霊が招きよせられて、のりうつるもの）」といたら近いのかもしれない。

人びとがペットをかわいがる状況は、パラサイト・シングルと呼んだ状況と非常に似ていることは先にも述べた。夫婦が子どものためにお金をかけつづけ、子供を楽にさせつづけることが、子どもの自立心をそぎ、子どもをスポイルしている。それが大量のパラサイト・シングルを生んでしまった。この状況は望ましくない。なぜなら、人間は自立して、社会の支え手に回るということで成長し、社会が再生産されるからである。いつまでも親のもとで、お金をかけてもらい、楽に生きることがいいことだとは思わない。だから子どもにお金をかけるならペットにかけたほうがはるかにいい。なぜなら、ペットはもともと

自立しないことを前提につくられた存在だからである。どうせお金をかけて絆を確認するのなら、未婚の自分の子どもにお金をかけてスポイルするよりも、ペットにかけてほしい。そのほうが結果的に、自立した大人が増える。もしかしたら、それが家族ペットの最大の効用かもしれない。家族ペットが不況で暗い日本を救うかもしれない、と山田（2004）は結論づけている。

仲村（1991）は、「犬・猫やその愛好者をみる目がだいぶ変わってきた。人間第一主義というか、人間あつての犬・猫という風には余り考えず、人間よりも犬・猫とまではいかなくとも、犬・猫に向かう人間の気持ちが人間へのそれ以上になること、そのような人間のいらっしゃることにも私なりの共感を少し持つようになった。けしからんとか阿呆らしいと思わなくなった。」と述べている。つまり、仲村自身がペットを人間以上に考えていなくても、そう考える人の気持ちは理解できる、ということなのだろう。

また、山谷（2005）は、東京書籍の家庭総合という家庭科教科書の中で「例えば祖母は孫を家族と考えていても、孫は祖母を家族と考えない場合もあるだろう。家族の範囲は全員が一致しているとは限らないのである。犬や猫のペットを大切な家族の一員と考える人もある」と書かれていることを問題視している。本来は、家庭科の教科書で教えるべき「家族のすばらしさ」や、「人として生きるうえでのモラル」ではなく、お祖母さんよりペットが大切という家族崩壊の教えのひどい記述だと、山谷は述べている。はたして本当にこの文章は家族崩壊を意味しているのだろうか。私はそうは思わない。孫が祖母を家族と考えないというのは一例であって、決して家族が崩壊しているという教えではないと私は考える。家族の範囲が全員で一致しているとは限らないということは、家族がライフスタイルへと変化してきている、ということを示しているのではないだろうか。では、家族がライフスタイルとはどういうことか。次章では日本の家族の歴史的変遷をみていきながら、家族ライフスタイルについて説明していくことにする。

2-2 家族論の先行研究

(1) 野々山の家族論

父、母、妻、息子など、親族位座をあらわす用語に比べて、家族それ自体は時代や文化によってつねにその内容を変化させてきた。では、いったい日本の家族はどのように変化してきたかという家族論について、本章では野々山久也（2007）の概念を用いて説明していく。

明治期以降、わが国の家族は、絶えず変容しつづけてきた。「従来においては家族が規範拘束的な存在であったり、あるいは集団拘束的な存在であったりしてきたが、今日においては、そして21世紀文明における新しい家族においては、むしろ個人がその生活選好にもとづいて思い思いに主体的に構築していく家族という存在(すなわち家族ライフスタイル)になり始めてきている」(野々山 2007)つまり、野々山の家族論のアプローチは、戦前の直系制家族、戦後の夫婦制家族、そして今日の合意制家族(ライフスタイル志向的家族)の3つである。直系制家族は「制度としての家族」であり、家族理念、家族規範、家族観、家族イデオロギーなどに注目する。夫婦制家族は、「集団としての家族」であり、家族構造、家族形成、家族構成や、集団次元での家族ライフスタイルなどに注目する。最後に合意制家族は「ライフスタイルとしての家族」であり、個人がもつ家族意識、家族ライフスタイル、生活選好、家族感情や家族アイデンティティに注目している、と野々山(2007)は述べている。

今日、多様化する家族の動向や新たな構造変動である合意制家族の生成を正確に把握するのは、制度としての家族や集団としての家族のほかに、個人の側から捉えられる家族ライフスタイルの概念が重要である、と野々山(2007)は述べている。この「ライフスタイル」という概念は、ドイツのマックス・ウェーバーが生活態度はライフスタイルである、といったことから始まった概念である。家族ライフスタイルには、夫婦ライフスタイル、親子ライフスタイル、嫁姑ライフスタイル、あるいは子育てライフスタイル、介護ライフスタイル、結婚ライフスタイルなどが存在する。となれば、もちろんペットライフスタイルもあるはずではないか。

尚、本章では特に記述がある場合を除き、野々山(2007)の概念を参考、もしくは引用しており、本章では次節以降の野々山(2007)からの引用や参考に際する参考文献の記述を、特に強調したい場合を除き省略することとする。

(2) 直系制家族について

直系制家族は、わが国において「家」と呼ばれてきた伝統的な家族であると、野々山(2007)は述べている。そしてその伝統的な家族である直系制家族が、他ならぬ家父長制家族であったという事実は家族社会学のテキストであれば例外なく指摘されている。ここでいう家父長制とは、社会学小事典(2005)によれば、「家長たる男子が強力な家父長によって成員を統率・支配する形態。家父長制の支配は、しきたりとなっているものが侵しがたいもので

あるという信念、つまり伝統によって神聖化された規範に対して、人びとが人格的に恭順することを基礎として成り立つ、官僚制以前の支配の形態である。家父長は伝統および競合する他の権力の制約を受けないかぎり、個人的、無制限かつ自由気ままに従属者に権力を行使できる地位の後継者である（以下略）」と定義されている。

明治政府は、その開始とともに直ちに中央集権化を企て、近代国家の形成のために各地に分布する姉家督制や隠居分家制や末子相続制などを、むしろ当時としては10%ほどの割合を占めるにすぎなかった武家に支配的であった長男単独相続制の家族慣行、すなわち父系優先の直系家族制を基礎にした「家」制度を意図的に制度化させたのである。巧妙に確立された直系家族制としての「家」制度は、明治政府にとっては不可欠な徴兵制や徴税制度の基礎であった。明治政府は、近代国家としての統一的な租税制度の確立の必要に迫られ、1872(明治5)年には土地制度の改革のために田畑の永代売買禁止を解除し、土地所有者には地券(土地の所在、地種、面積、価格、持主などを記載したもの)を交付し、土地の私有制度を確立した。そして1881(同14)年には地租改正を完成させた。

こうして制度化していった直系家族制の「家」制度は、国民のあいだに着実に浸透し、制度として家族であると同時にモデルとしての家族にもなっていた。つまり、直系家族制としての「家」制度は、大多数の国民が農民であった当事の農業経営において集約的経営のもと家計と経営とが未分化な形で維持されながら、家長(戸主)によって統率された家族成員たちの無償の労働力をフルに活用することができ、生産性を高めていくのに極めて好都合であった。また、長男単独相続制は、家産を縮小させず維持していくのに必要な最小限の成員をその内部に残し、その他の成員たちを外部に排出していく方法としても、極めて有効な方策であった。

「家」制度は、また家族イデオロギーとしても定着していった。明治政府は、天皇制の国家を維持するために「家」制度を国家護持のイデオロギーとして活用した。

そして、直系家族制としての「家」制度の最も重要な側面は、戸主権の存在と、相続における長男と次三男以下とのあいだの明確な差別である。このことの意義は、1つには家産の分散の防止がある。家産としての田畑に余裕があれば分割も可能であるが、もともと狭小な田畑では、それをさらに分割することは賢明ではない。次三男以下は、たいていは家業に奉仕しつづけるか、奉公に出るか、あるいは他家の婿養子になるかしかない。このことは、つぎに生じる可能性のある相続における葛藤を予め防止することになると同時に、それぞれの地位に応じた予期的社会化にも寄与している。というのは、当時の平均寿命

から理解できるように、幼い子どもの死亡率は非常に高く、また若い年齢で配偶者が死亡する場合も少なくなかった。先祖供養を中心とする死者の弔いのための宗教活動は、家族機能として不可欠な活動であった。そこで墓や仏壇や位牌を管理し、仏事を主宰する任務への社会化は、早くから実施される必要があった。それを「家」の継承者としての長男の任務として位置づけることは、むしろ合理的であったのだ。さらに当時は、社会保障制度もなく、老親扶養は子どもの任務であった。長男単独相続制は、その任務を家産相続と引き替えに跡取りおよびその夫婦に負わすことによって、次三男以下の夫婦を解放した。こうして長男には跡取りとしての自覚を早くから社会化させるとともに、次三男以下や娘たちにも幼いころから、それぞれの地位に応じて自らの人生を自覚するように予期的社会化が行われた。

「家」制度がもたらした意図せざる結果は、それが禁欲的で恭順な労働力をつねに排出することによって、わが国の急速な工業化に貢献したことである。それは労働力の提供として次三男以下が長男単独相続制によって排出されたという量的な効果だけではない。現に、初期工業化の段階においては一般的に多量の労働力の需要は、存在しなかった。したがって、重要なのは、むしろ「家」制度のもとに実行された予期的社会化であった。つまり、予期的社会化によって次三男以下が保持していた出生順位や性別による地位への恭順と高いアスピレーションによる所属主義と業績主義との結合から培われていった高い「組織化の能力」であった。

わが国の初期工業化にとって、「家」制度は、結局のところ、その発展の内在的な必要条件の整備に大いに貢献したことになる。長男一人に家産を相続させ、資本の集中（蓄積や投資）を可能にするとともに、高い組織化の能力を有する次三男以下の滅私奉公的な貢献と、その背後にあつて彼らを支える無限定的な「家」の論理によって、わが国の国家や企業は、徐々にその資本の蓄積を可能にしていったといつてよい。

当時の家族システムは、「家」制度という家族制度に対して、対自的に問うことなく、家(すなわち本籍)に所属することで家族意識をいなく人びとが自らを「家」制度の家族規範に適うように促進し、つねに禁欲的に自己言及し、順応していったのである。その意味では、明治期以降の急速な工業化の進展は、まさに家族システムによる即自的自己言及の結果であったということになる。

(3) 夫婦制家族について

戦後改革の第1は、民法の改正と戸籍制度の改正による「家」制度、すなわち直系家族制の廃止であった。この戦後買改革の第1の民法改正については、それが直ちに家族意識や家族構造の変動に結びつくものでは必ずしもなかった。戦前からの工業化の進展とともに、家族意識の実態においては夫婦制家族の意識の芽生えは始まっていたが、長いあいだ培われてきた「家」意識や長男単独の相続慣行などは、民法改正によって直ちに変更されるものではない。その後も庶民のあいだの家族慣行として持続していった。

確かに戦後、わが国では民法改正によって制度としての家族という点での民主化や近代化が法的に確立した。しかし法制上での改革によって、それまでの家族慣行が直ちに変化することはあり得ない。単独相続慣行の持続（すなわち、次三男以下の排出）や老親の単独扶養慣行や婚姻後の夫方名字への同姓化慣行など、従来の直系制パターンは、戦後も揺るぎなく継続されていった。と同時に、都市における給与生活者の家族においては「家」制度の廃止がそれまでの家族生活にそれほど大きな影響もなく、むしろ法改正による夫婦家族制への移行が時代の必然として容易に受け止められていった。つまり、民法改正によって意識が変わったのではなく、工業化とともに戦前にすでに都市を中心に実質化しつつあった夫婦単位の家族構造が戦後の法改正によって正当化されたにすぎなかったというわけである。

一方、農村における単独相続慣行の持続は、戦後においても戦前の次三男たちと同じく農村には予期的社会化のもとに所属主義と業績主義との結合した高い組織化の能力を保持したままの次三男たちが多数、存在していることを意味していた。

1920（大正9）年の第1回「国税調査」時点においても、わが国の家族形態の半数以上の54%は核家族形態にあった。それが1955（昭和30）年ころには約60%を占め、1975（同50）年ころには約64%位にまで上昇した。しかし、それ以降下降しつづけている。一方、当時としては戦後における直系同居家族世帯の実数は、減少することなく、むしろ上昇している。このことは、高度工業化に向かう段階でのわが国の家族形態の基本パターンは、農村においても都市においても三世代以上が同居する直系同居家族の形態であったこと、つまり戦前に制度化された長男単独相続の家族慣行が根強く維持されていたことを意味している。

高度工業化の段階での「家族生活の向上動機」は、主として第2次世界大戦の戦勝国であるアメリカの文化の導入によって誘発された。それは当時の「三種の神器」の1つであったテレビをとおして映像情報として伝達された。人びとがテレビから目にしたアメリカ

文化における理想モデルとしての家族像は、自家用車や多くの家庭電化製品に囲まれながら固定的性別役割分業のうえに成り立つ、いかにも幸せそうな夫婦と子どものみによって構成される1つの集団としての家族像であった。マイホーム主義が台頭するのも、この頃であった。かつての家族意識であった本籍にもとづく「家」への所属意識は、徐々に衰退し、人びとは夫婦と未婚の子どもからなる核家族を1つの家族と意識するようになった。夫婦制家族への家族観の移行は、とくに民法の改正や婚姻とともに新戸籍が創設されるという戦後の戸籍制度の改正の結果としてではなく、むしろ都市における個々の家族システムが夫婦単位を中心にして構造化されるという夫婦制家族を個別的に実践していったからにはかならなかった。

構造的に自己の境界を明確にしはじめつつあった夫婦制家族は、高度工業化に首尾よく順応するために「夫は外で働き、妻は家庭で家事育児」という性別役割分業をますます固定化させていった。企業に求める賃金も、妻子を養えるだけの家族賃金が当然のこととして認識されるようになった。この段階において、夫婦制の家族イデオロギーは見事に完成したことになる。結局のところ、夫婦制家族の自己組織化とは、当時の家族システムが高度工業化を志向する企業の能率主義に同調しながら、主たる稼ぎ手である夫（父）を中心にして生活向上を目指して家族内部に固有の分業構造、勢力構造、結合構造、ならびに情緒構造を築くべく「即自的自己言及のメカニズム」を状況埋没的に作動させていく過程であったということになる。

直系家族制は、わが国における近代資本主義化を促進し、高度工業化をもたらしたが、逆に高度工業化は夫婦家族制を促進していったのである。それは、かつての規範拘束性からの解放と同時に夫婦制という新たな集団拘束性のうえに成立する家族構造の出現であった。

(4) 合意制家族について

家族制度や家族集団という概念に対して、改めて家族という概念とライフスタイルという概念とを結合させて「家族ライフスタイル」という新概念を野々山(2007)は提起しているわけだが、このライフスタイルという概念の源流を求めて社会学の文献をみれば、そこには1人の社会学者が存在している。ドイツの社会学者であるマックス・ウェーバーである。ウェーバーは、19世紀末から20世紀の初頭に活躍した社会学者である。

ウェーバーは、人間の行動のなかで人びとが主観的な意味あいを含ませている行動にか

ぎって、それを行為として区別し、その行為のうちでも他の人びととの関わりにおいて成立している行為、すなわち「社会的行為」について行為者が志向している意味の解釈を重視し、そのことをもって社会学的アプローチとした。ウェーバーはさらに階級や身分を問題にし、まず階級または階級の状況とは、個人ないし他の無数の人びとが同じか類似の類型的な利害関係のもとにおかれている事態を指すとし、それは財貨の生産と営利に対する関わり方にもとづいて構成されているものである、と論じた。それに対して、身分または身分的状況とは、社会的評価における積極的または消極的な特権づけの根拠となるものであって、その特権づけに対して効果的な享受の要求がなされ、ときに階級的状況をも左右する事態を招くところの、固有の「生活態度」にもとづいた財貨の消費原理、受けた教育に相応しい生活形式、ならびに門地や職業上の威信などから構成されているものである、と論じた。ウェーバーによるこの「生活態度」という概念は、ハンス・ガースとライト・ミルズによって英語に翻訳されて解説される際に、主として「ライフスタイル」として紹介されたことにはじまっている。

後期工業化の段階では、人びとの家族生活における志向は、かつての生活向上を目指した向上動機から生活選好の充実を目指す「家族生活の選好動機」へと変化していくことになる。それはライフサイクルにおける変化や経済的自立自の可能性をとおして、女性たちもそれまで家族システムに端から拘束されていたライフサイクルから自由になり、自らのライフコースを選択できる可能性が出てきたからにはほかならない。

男性にとっても女性にとっても、結婚（いつ誰と）や出産（いつ何人）などに関連しての従来からの年齢規範や性別規範は、希薄化していくことになる。もちろん逆に、このことは結婚したからといって、直ちにできるとは限らなくなった。選好動機にもとづけば、一方の選好に適っても他方に敵うとは限らない。結婚が遅れる（晩婚化）のも当然である。一方、選好動機が一致すれば、早い結婚も成立する。したがって、晩婚化も含んで、今後は婚期分散化という現象（結婚ライフスタイルの多様化）の一般化となっていく。

結婚ライフスタイルもその1つの下位概念としての位置にある上位概念としての「家族ライフスタイル」については、暫定的には一応、「家族生活に関わる生活諸関係ならびに生活諸資源に対する個人あるいは家族成員の自主的な選択行動パターン」という定義である。家族ライフスタイルは、もともとは個人の次元での概念であって、個人が個人的に保持している行動パターンのことである。

しかし、その選択が家族成員全体で決定されとなれば、それがその家族集団にとって

の「家族ライフスタイル」ということになる。ここでは家族成員のあいだでの合意形成の過程が重要になってくる。家族ライフスタイルは、かつてのように制度や規範や理念などによってあらかじめ規定されてしまっていない。むしろ成員のあいだでの合意にもとづく任意的選択、それも経験の積み重ねという展開のなかで、時間的経過とともにのつねに変化する可能性のある選択としての家族行動パターンのことである。

ところで、単独の研究理念として成立することになったライフスタイル論は、やがて企業の戦略対象としての単なる消費者ではない、主体的に生きる生活者が研究の対象として認識されるようになり、生活の質をはじめ自己実現を志向しつつ自ら主体的に構築していく新しいライフスタイルの理論へと向かうことになる。

21世紀に入って、いま家族の形態にしろ、構造にしろ、機能にしろ、それらが家族ライフスタイルとして家族成員たちによって任意的に選択されるものに変化してきているのであれば、そこには「合意制家族の生成」、すなわち任意的選択を規範としながら合意形成を育んでいく「合意制家族の制度化」が開始していることになる。このことは、21世紀における家族の形成規範が改めて合意家族制であると規定されることを意味する。

第3章 研究方法

3-1 調査仮説

先にも述べたが、制度や集団として家族を捉えているひと（直系制家族、夫婦制家族）は、ペットを家族成員のなかでそれほど重要とは考えておらず、逆に家族をライフスタイルであると考えているひと（合意制家族）はペットを家族成員の中で重要だと考える傾向にあるのではないかと。いいかえると、家族を直系制家族や夫婦制家族と捉えていけば、ペットはやはりペットだと考え、家族を合意制家族として捉えていけば、ペットは家族だと考える傾向にあるのではないかと、というのがわたしの仮説であるが、次章から実際の調査方法について説明していく。

3-2 調査方法

調査対象は、日本人大学生の家族、ペットに関する考え方を調査するために、わたしと同世代である同志社大学のペットを飼う学生とした。調査期間は11月末から12月半ばにかけての約1ヶ月間。同志社大学田辺キャンパスもしくは今出川キャンパス、そして新町キャンパスへ足を運び、主に食堂やカフェテリアなどの比較的人が集まりやすい場所で調査を

おこなった。調査方法は、統計的なデータを取り、一般的な妥当性を測るために量的調査とした。最終的に、18歳から24歳まで、1回生から院2回生まで、87人分の調査票が回収できた。

3-3 JGSS2000について

わたしの仮説を証明するためには、まず被験者が直系制家族モデルなのか、夫婦制家族モデルなのか、それとも合意制家族モデルなのかという3つのタイプに分ける必要がある。

本稿では、JGSS2000プロジェクトによる調査データを基に、被験者が直系制家族モデルか、夫婦制家族モデルか、合意制家族モデルかを分けることにする。JGSS (Japanese General Social Surveys) プロジェクトは、アメリカのGeneral Social Surveyに対応する総合的社会調査を2000年以降日本で毎年実施し、その個票データをデータ・アーカイブで提供しようとするものである。日本人の意識や行動を総合的に調べる社会調査を継続的に実施し、二次利用を希望する研究者にそのデータを公開することで、多様な学術研究を促進しようとするプロジェクトなのだ。

国際比較も視野に入れつつ、日本社会の理解に不可欠な日本人の意識や行動の実態把握に主眼が置かれている。調査対象者の世帯構成、就業や生計の状況、両親や配偶者の職業、対象者の政党支持、政治意識、家族観、人生観、死生観、宗教、余暇活動、犯罪被害など広範囲の調査事項を網羅した調査となっている。調査対象が幅広く、全体感、網羅感がある実証データである。

3-4 従属変数について

ここでは、アンケートの被験者が、直系制家族、夫婦制家族、合意制家族のそれぞれのモデルかを調査するための、それぞれの家族モデルに該当すると考えられる変数について説明していく。

変数については、川上慎一 (2008) が、JGSS2000 の質問項目から直系制家族、夫婦制家族、合意制家族のそれぞれに該当すると考えられる変数を加算し、新規変数を野々山 (2007) ならびに落合 (2004) が示す該当モデルの規範をもとに創出したものをもとに分析を行うことにする。その変数を示したものが表 1-1~表 1-4 である。

表 1-1 従属変数として使用した変数と、該当家族モデルについて

コード と回答	変数名と回答内容	該当家族モデル
381	APPCCSXB 希望する子供の性別	
	もし子供を一人だけ持つならば男の子か女の子かどちらを希望しますか	
1	男の子	直系制
382	OP4NAME 夫婦別姓意識	
	結婚した男女は名字をどのようにしたらよいとお考えですか	
1	当然, 妻が名字を改めて, 夫のほうの名字を名乗るべき	直系制
2	現状では妻が改めるべき	夫婦制
3	同じ名字を名乗るべきだがどちら側でもよい	夫婦制
4	夫婦別姓でよい	合意制
383	OP7CMTRA 自分の墓について	
	あなた自身の墓についてどのようにお考えですか	
1	私の家に入りたい	直系制
2	配偶者の家の墓に入りたい	直系制
3	自分と配偶者の代から始まる墓に入りたい	夫婦制
4	自分と配偶者だけの墓に入りたい	夫婦制
5	じぶんひとりの墓に入りたい	合意制
6	合葬式の共同墓に入りたい	合意制
7	墓に入らず海や山への散骨にしたい	合意制
402	OP2GNR 三世代同居観	
	あなたは一般に三世代同居は望ましいことだと考えますか	
1	望ましい	直系制
521	RR6ACCT 家計管理	
	夫婦は収入をどのように管理するのが好ましいと考えますか	
1	夫の小遣い以外はすべて妻が管理	夫婦制
2	妻の小遣い以外はすべて夫が管理	直系制
3	日常の支出以外は夫が管理	直系制

4	全収入をひとつにまとめ、夫婦は必要な額をそこから支出	夫婦制
5	妻と夫の収入の一部は一緒にするが大部分は夫と妻が別々に管理	合意制
6	夫婦の収入を別々に管理	合意制
665	QDDKILLA 安楽死への賛否	
	不治の病の患者が安楽死を望む場合、医者が安楽死を行える法律を作るべきか	
1	はい	合意制

表 1-2 直系制家族モデルに該当すると考えられる変数について

コード と回答 番号	変数名と回答内容
381	APPCCSXB 希望する子供の性別
	もし子供を一人だけ持つならば男の子か女の子かどちらを希望しますか
1	男の子
382	OP4NAME 夫婦別姓意識

	結婚した男女は名字をどのようにしたらよいとお考えですか
1	当然, 妻が名字を改めて, 夫のほうの名字を名乗るべき
383	OP7CMTRA 自分の墓について
	あなた自身の墓についてどのようにお考えですか
1	私の家に入りたい
2	配偶者の家の墓に入りたい
402	OP2GNR 三世代同居観
	あなたは一般に三世代同居は望ましいことだと考えますか
1	望ましい
521	RR6ACCT 家計管理
	夫婦は収入をどのように管理するのが好ましいと考えますか
2	妻の小遣い以外はすべて夫が管理
3	日常の支出以外は夫が管理

表 1-3 夫婦制家族モデルに該当すると考えられる変数について

コード と回答 番号	変数名と回答内容
382	OP4NAME 夫婦別姓意識
	結婚した男女は名字をどのようにしたらよいとお考えですか
2	現状では妻が改めるべき

3	同じ名字を名乗るべきだがどちら側でもよい
383	OP7CMTRA 自分の墓について
	あなた自身の墓についてどのようにお考えですか
3	自分と配偶者の代から始まる墓に入りたい
4	自分と配偶者だけの墓に入りたい
521	RR6ACCT 家計管理
	夫婦は収入をどのように管理するのが好ましいと考えますか
1	夫の小遣い以外はすべて妻が管理
4	全収入をひとつにまとめ、夫婦は必要な額をそこから支出

表 1-4 合意制家族モデルに該当すると考えられる変数について

コード と回答 番号	変数名と回答内容
382	OP4NAME 夫婦別姓意識
	結婚した男女は名字をどのようにしたらよいとお考えですか
4	夫婦別姓でよい

383	OP7CMTRA 自分の墓について
	あなた自身の墓についてどのようにお考えですか
5	じぶんひとりの墓に入りたい
6	合葬式の共同墓に入りたい
7	墓に入らず海や山への散骨にしたい
521	RR6ACCT 家計管理
	夫婦は収入をどのように管理するのが好ましいと考えますか
5	妻と夫の収入の一部は一緒にするが大部分は夫と妻が別々に管理
6	夫婦の収入を別々に管理
665	QDDKILLA 安楽死への賛否
	不治の病の患者が安楽死を望む場合、医者が安楽死を行える法律を作るべきか
1	はい

3-5 独立変数について

本稿の量的調査における独立変数は、表2に表したとおりである。

表2 独立変数として使用した変数について

	変数名と回答内容
f1	ペットの有無
	あなたはペットを飼っていますか
f2	ペット数

	あなたが飼っているペットの数をお答えください
f3	ペットの種類
	どのような種類ですか
f4	性別
	あなたの性別をお答えください
f5	年齢
	あなたの年齢をお答えください
f6	学年
	あなたは現在何回生ですか
f7	同居人数
	あなたを含めて同居されている方は何人ですか
f8	ペット重要度
	家族全員とペットを含めてあなたから心理的に近い順に並べてください

第4章 結果と分析

まず、87人分の調査票をエクセルに打ち込んだ。エクセルに打ち込んだものを、今度はSPSSで分析していった。87人がそれぞれ、直系制、夫婦制、合意制のどの家族モデルに該当するかを調べるため、q1からq6までの回答をもとに、表1-1を参考にしながら得点化していき、そして平均してわりだした。平均したもののなかで一番数値が高かったものがその人の家族モデルとした。それが次の表3、そして図にして表したものが図1である。

表3 家族モデル度数

	度数
直系モデル	14
夫婦モデル	59
合意モデル	14
合計	87

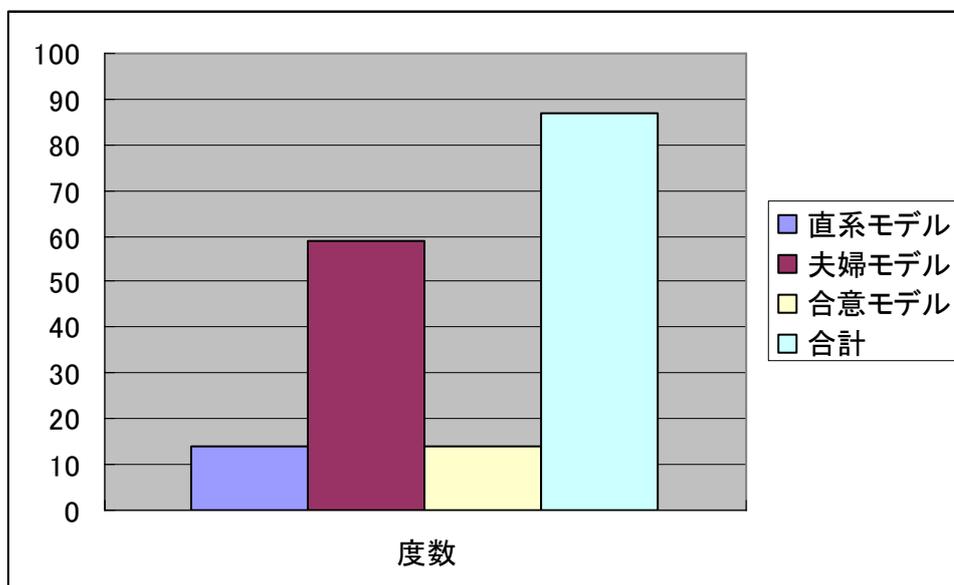


図1 度数別家族モデル

先にも述べたように、野々山（2007）が、今日においては、そして21世紀文明における新しい家族においては、むしろ個人がその生活嗜好にもとづいて思い思いに主体的に構築していく家族という存在(すなわち家族ライフスタイル)になり始めてきている、と述べているとおり、まさに「なり始めてきている」段階であるということがこの表から読み取れる。直系制家族モデルが14人、合意制家族モデルが14人という中、夫婦制家族モデルが59人と、大差で夫婦モデルが多い。

次に、それぞれの家族モデルの中での、ペット上位、ペット下位の数を見てみる。ここでいうペット上位、ペット下位とは、調査票の質問項目 F8「家族全員とペットを含めて、あなたから心理的に近い順に並べてください。」の回答で、私を除いて半分よりもペットが上位であれば「ペット上位」、逆にペットが半分より下位であれば「ペット下位」であるとした。エクセルに打ち込む際、ペット上位ならば1、ペット下位ならば2とした。先にSPSSでわりだした直系モデル度数、夫婦モデル度数、そして合意モデル度数と、このペット上位ペット下位をクロス集計したものが次である。

表4 TYPEとペット上位・下位のクロス表

					合計
			ペット上位	ペット下位	
TYPE	直系モデル	度数	3	11	14
		TYPE の %	21.42857143	78.57142857	100
	夫婦モデル	度数	15	44	59
		TYPE の %	25.42372881	74.57627119	100
	合意モデル	度数	4	10	14
		TYPE の %	28.57142857	71.42857143	100
合計		度数	22	65	87
		TYPE の %	25.28735632	74.71264368	100

これを分かりやすく表と図にしたものが次である。

表5 家族モデル別ペット重要度

	ペット上 位	ペット下 位	度数
直系モデル	3	11	14
夫婦モデル	15	44	59
合意モデル	4	10	14

合計	22	65	87
----	----	----	----

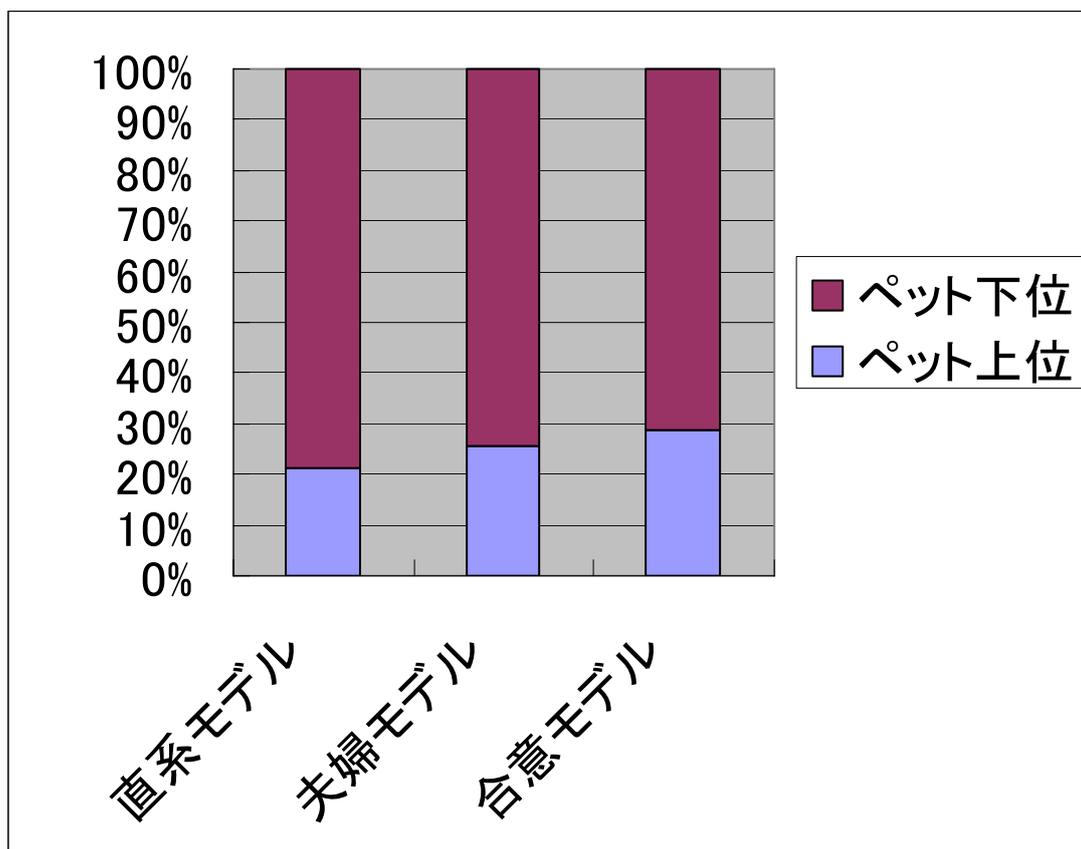


図2 家族モデル別ペット重要度

ペット上位は全体の約4分の1であった。そして、それぞれの家族モデル別で優位に差は出なかった。がしかし、図を見てみたところ、直系制モデルよりも夫婦制モデル、夫婦制モデルよりも合意制モデルと、ペット上位の割合がわずかではあるが増えているのがわかる。優位な差こそ出なかったものの、仮説の方向性は支持されたことになる。

第5章 考察

表3を見れば分かるように、直系モデル、合意制モデルに比べて夫婦制モデルがまだまだ多いことから、いわゆる移行の時代にいるのだということがうかがい知れる。合意制家族が徐々に浸透しつつあるものの、まだまだ直系制家族や、夫婦制家族の考え方は私

たちの中に深くしみついているのだろう。

87人を3つの家族モデルに区別したうえで、家族モデル別でのペット重要度を調べたが、先にも述べたように優位に差が出なかった。そもそもペット上位が全体の4分の1であったことについて、正直残念という気持ちよりも安心した、という気持ちのほうが強い。調査票の質問項目f8で、回答が「私→犬→母→妹→父」という明らかにペット上位の回答もみられたが、どの家族成員よりもペットが一番自分に心理的に近いというのは少し悲しい気持ちになった。そのうえで、合意モデルならばペット上位が多いという仮説であったが、わずかに合意モデルに近づくにつれてペット上位が増えているものの、優位な差は出なかった。これはもちろん、まだまだ移行の時代であるということもひとつ要因にあげられる。ペットが家族のような、または家族成員以上の存在に徐々になりはじめていくということは、仮説の方向性が支持されていることから分かるが、今後また時代が変わり、家族もさらに変化を遂げるだろう。どのように変化するかはわたしにはわからない。しかし、合意制家族が浸透していけばいくほどペットの家族化が進むのではないかとわたしは考える。

そしてペット上位、ペット下位に関係なく、父親が一番下位にきていた調査票は、87のうち26もあったことは非常に興味深かった。ペット上位22よりも多い父親最下位26は、少し考えものである。

第6章 おわりに

ギデンズ(2004)によれば、家族は、多くの人たちに憩いや安らぎ、愛情をもたらす。しかしながら、家族はまた、搾取や孤独感、根深い不平等の場になる可能性もあるのだという。今日、人びとが経済的目的や家族の強い勧めからではなく、むしろ自由意志から結婚生活に入っていく事実は、人びとに自由とともに新たな重圧をもたらす。現実には、結婚生活は多くの勤勉な努力を要求している、とベックとベック＝ゲルンスハイムは結論づけているともギデンズは述べている。ベックとベック＝ゲルンスハイムは、いまの時代を、家族生活と労働、愛情、それに個人的目標を追求する自由とのあいだで利害が衝突する時代とみなしている。ここでいう「個人的目標を追求する自由」というのは、野々山のいう家族ライフスタイルと同じではないだろうか。でも確かに、みながみな、「個人的目標を追求する自由」を追いもとめるならば、どうしてわたしたちは「家族する」のだろうか。ベックとベック＝ゲルンスハイムは、結婚を、単に二人の関係ではなく、職業や政治などすべてに関する闘争の場であると述べている。ではなぜ、私たちはそのような闘争の

場である結婚をしてまで「家族」をつくるのか。その答えは、ベックとベック＝ゲルンスハイムによれば簡単なのだという。それは、「愛情」なのだ。人びとは、愛情のために結婚をし、愛情のために離婚をする。そして人びとは、希望をいだき、後悔をし、再び試みるという果てしない循環にかかわっていくのだという。いまの時代の錯綜状態を説明するのに、「愛情」という答えはあまりにも安易すぎると思われるかもしれない。しかし、それは私たちのいま生きる世界が、あまりにも抗し難い力を持ち、非人格的で、具体性を失い、急激に変化しているため、愛情がますます重要になってきたからに他ならない、とベックとベック＝ゲルンスハイムは主張しているのだという。そして、ベックとベック＝ゲルンスハイムによれば、愛情とは、人びとが真に自己を見いだし、他者との結びつくことができる唯一の世界である。不確実性とリスクに満ちた今日の世界においても愛情は実在する。ここでいう愛情とは、自己の探索、自分と相手と本当に触れ合いたいと渴望すること、身体を共にすること、考え方を共にすること、互いに出会うこと、告白して許しを得ること、相手を思いやること、過去にあったことがらや現在起きていることがらを追認し、精神的に支えること、現代の生活が生み出す不信や不安を打破するために、憩いの場と信頼感を強く願うこと、であるのだという。たしかに、これは、ペットにも当てはまることなのかもしれない。愛情がなければそもそもペットを飼おうという気持ちにならないだろうし、ペットに対する愛情があるからこそ、ペットが家族のような、あるいは家族以上の存在になりえるのだろう。

愛情は人びとを絶望に陥れると同時に人びとを慰める、とベックとベック＝ゲルンスハイムは論じている。愛情とは、「愛情に特有な法則にしたがい、人びとのいづく期待や不安、行動様式のなかに深く刻んでいく強烈な力」である。愛情は、揺れ動く今日の時代において、すでに新たな信念の源となっているのだ。どんな時代がこようとも、きっと家族がなくなることはない信じたい。そこに「愛情」がある限り、家族は決してなくならないのだと。

[注]

[参考文献]

アンソニー・ギデンズ，2004『社会学（第4版）』有限会社而立書房.

野々山久也，2007『現代家族のパラダイム革新——直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ』東京大学出版会.

濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編，2005『社会学小事典 新版増補版』有斐閣.

新村出編，1998『広辞苑第五版』株式会社岩波書店.

山谷えり子, 2005, 「家庭科教科書も危ない！」京都：PHP 研究所編『Voice』京都：PHP 研究所, 196-203.

仲村祥一, 1991『現代自己の社会学』世界思想社.

山田昌弘, 2007『家族ペット：ダンナよりもペットが大切!?』文藝春秋.

山田昌弘, 2004『家族ペット：やすらぐ相手はあなただけ』サンマーク出版.

[参考 URL]

ベネッセコーポレーション, 2008『ヒトと愛犬・愛猫との生活総合誌』

(<http://pet.benesse.ne.jp/menu/>, 2008. 12. 13)

犬の学園ハッピーナ幼稚園, 2008『ワンちゃんの幼稚園ってどんなところ?』

(http://pet.goo.ne.jp/special/sp_69.html, 2008. 12. 13)

バンダイ, 2008『ネットで発見!! たまごっち公式ホームページ』

(http://tamagotch.channel.or.jp/toy/tama_color/index.html, 2008. 12. 14)

(40 字×30 行 本文：26 ページ 400 字詰め原稿用紙換算：50 枚)